

仏画の独尊像における遠近表現技法に関する研究

— 東京藝術大学大学美術館所蔵「孔雀明王像」の現状模写を通じて —

鄭 雲卿（東京藝術大学大学院）

原本：絹本着色「孔雀明王像」 一幅 東京藝術大学大学美術館所蔵

縦：98.9cm 横：57.6cm 鎌倉時代

1. 研究概要

孔雀明王図には様々な図像が遺されている。先学による研究の多くは、こうした図像に関するものである。本研究では、孔雀明王図について宗教的側面のほか、美的観点からその絵画表現を考えた。仏画における表現方法は、一般の絵画とは異なり、画面の前後関係の表現は、絵具や墨による暈しなど濃淡や明度の高低差によるものではなく、画中の図像の大きさ等により位置関係や距離感を表す遠近法を用いたものが多い。研究対象とする東京藝術大学大学美術館蔵「孔雀明王像」（以下、藝大本）のような独尊像では、前後関係を図像の重なりによって表現することはできない。本作品の画面の現状は経年劣化により絵具層ならびに料絹の変退色や欠失が生じているが、量感が感じられ、空間の中で存在感がある図像となっている。本研究はこうした仏画の独尊像の遠近表現について検討するものである。

2. 研究目的

本研究では「孔雀明王像」の現状模写を実際に行い、当時の制作工程を追体験することを通して各材料や表現手法と画面の前後表現の相関関係を検証することで、孔雀明王像に関する新たな解釈を提示することを目的とする。

3. 孔雀明王像の遠近構造の理解

孔雀明王像の構造を理解するため、様々な作例を観察する必要があると判断した。平成29年4月から奈良国立博物館で開かれた「快慶」展や平成29年10月から京都国立博物館で行われた「国宝」展での実見を通し、孔雀明王像の仏像や仏画の遠近構造と前後表現の特徴を観察した。

	奈良国立博物館 「快慶」展	京都国立博物館 「国宝」展	京都国立博物館 「国宝」展
作品名	孔雀明王坐像	孔雀明王像	孔雀明王像
所蔵先	和歌山・金剛峯寺	東京国立博物館	京都・仁和寺
遠近構造	・孔雀の嘴→頭部→胸部→ 肩羽部分→蓮華座→明王→ 飾り尾→背景	・孔雀→明王→飾り尾→背景	
遠近表現		・色料層により明王の輪郭線を 和らげ、慈悲相である孔雀明王 の表現 ・背景に藍と推察される深い青の 使用、明王の背後に深い空間の 表現	・墨線の濃淡による前後関係の 表現 ・背後の雲をともしう天空におけ る、墨線の強弱による神々しい 空間の表現

4. 原本の観察と考察

赤外線写真を通して、画面表面には彩色により見えない墨線を確認することができた。箇所によって墨線の濃淡に相違があることから、前後関係に気を配って引かれたと考えられる。また、熟覧を通して最も強く感じ取ったのは穏和な明王の色調と空間表現である。明王の肌色は冷たさを感じるような桃色だが、着衣の澄んだ水色や黄色、金泥と白の文様、明るい緑との調和をなして仁慈に富んだ印象を与えている。孔雀の両翼は肩羽部分から羽先までの奥行きが明瞭に感じられた。明王の背後にある楕円形の飾り尾には根元から外縁に向かって細密な金泥線の強弱変化があり、画面手前から奥への立体感が表現されている。更に、背景には翼の青とは異なる穏やかな群緑が用いられ、尊像と背景との距離を表している。こうした要素は総合的に活かされ、画面上に明王と孔雀が浮かび上がるような印象を受けた。

5. 模写を通しての考察

研究対象である藝大本とそれ以外の孔雀明王像の遠近構造や表現を観察した結果、藝大本の遠近構造は次のようであると推察した。

孔雀の嘴→孔雀の頭部→胸部→肩羽部分→蓮華座→明王→羽先部分→飾り尾→背景
この構造を念頭に置き模写を進めるにあたり、解明すべきことは次の四つである。

- ①「墨線の濃淡」②「孔雀と明王の関係」③「背後の飾り尾の表現技法」④「背景の表現技法」

①「墨線の濃淡」

赤外線写真と熟覧などの目視調査を通して、箇所により墨線の濃淡変化があることが確認できた。そうしたことを念頭に置き、下描線を写し上げながら、骨法の強さを失わないように気を配った。

②「孔雀と明王の関係」

孔雀の頭部は明王の下半身に重なるように位置し、画面の中心となる箇所である。東博本の孔雀明王像の孔雀の表現は、柔らかい明王の表現と比較して暈しが少なく、力強い表現がなされている。孔雀は画面の中央に配置され、遠近構造的にも最も手前に配置されるためだと考えられる。本作品の修理時の記録写真により裏彩色を確認することができたが、孔雀の頭部や胸部に施されていなかったと断言することは難しい。また、孔雀の頭部の輪郭線は経年劣化により金泥か截金か判断しにくい状態であった。以上のような、孔雀の頭部と胸部の裏彩色の有無と頭部の輪郭線の表現技法により孔雀と明王の位置関係が左右されると考え、実験を行った。



【図1】

[図1] の左は孔雀の頭部と胸部に裏彩色を施した上に緑青を薄く塗ったもの、右は裏彩色を施さず緑青を薄く塗ったものである。裏彩色を施した方が、表は薄い顔料層でも孔雀が明王より画面の前に浮かび上がる効果があると考えられる。



【図2】

[図2] は裏彩色を施した上に、頭部の輪郭線にそれぞれ金泥と截金を施したものである。輪郭線に截金を用いることで、明王より孔雀の図像が前に出る効果が得られると判断することができる。



[図3]

③ 「背後の飾り尾の表現技法」

現状の飾り尾の地色は経年劣化により茶褐色の色調であるため、判断が難しい状態である。しかし、飾り尾は根元から外縁へ弧の形の細密な金泥線の強弱変化があり、手前から奥へと空間表現を考慮し引いたことが確認できる [図3]。

④ 「背景の表現技法」

背景の色は絹目から焼き群青と考えられる顔料が観察できるが、画絹の表面には落ち着いた緑がかかった青が残っている。これは孔雀の羽の青色と背景の青色を区別し、奥行きを感じさせるためだと推測される [図3]。

こうした4点を最も重要な点として作業を進め、画面全体に古色をかけ、全体の均衡を整え仕上げた。

6. まとめ

本研究は仏画を宗教画としてのみみる立場から一步距離を置き、あくまで一枚の絵画として取り上げたが、前後関係の表現は本尊の荘厳さを表すことへ繋がると実感した。また、様々な図像との比較や模写の制作を通し、仁慈に富んだ明王の表現とそれに比べ力強い孔雀の表現が画面の前後関係を成すことが確認できた。最後に、基底材として用いられた絹本は下層部も絵画表現に影響するため、墨線を上げる段階から作品が仕上がるまで、全ての工程の計画を明確に立てて制作した作者の意識の高さを学び取ることができた。

参考文献

佐和隆研『日本の密教美術』 便利堂 1961年

増記隆介『孔雀明王像』『日本の美術』(508) 至文堂 2008年

京都絵美「東京国立博物館所蔵国宝「孔雀明王像」の原図像の復元に関する研究」東京藝術大学大学院博士論文 2012年

原瑛莉子「孔雀明王像の研究—東京藝術大学大学美術館所蔵本を中心に—」2014年